

奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために
Serve to Change Lives

2021-22年度 RI会長/シェカール・メータ
RI.D2590ガバナー/小倉 正
横浜旭RC会長/北澤 正浩

国際ロータリー第2590地区

横浜旭ロータリークラブ

事務所 横浜市旭区二俣川1-37-3 NJTS1階/〒241-0821
TEL.045-465-6702/FAX.045-465-6712
http://yokohamasahirc.cho88.com
Email: asahirc@titan.ocn.ne.jp
例会場 横浜市旭区二俣川1-45-30工藤ビル
(榎岡田屋3階会議室)
例会日 毎週水曜日/12時30分～1時30分



横浜西部病院へフェイスシールド寄贈



横浜市へ医療機器支援



旭ふれあい区民まつり

2021年11月24日 第2444回例会 VOL. 53 No. 6

- 司会 副SAA 五十嵐 正
- 開会点鐘 会長 北澤 正浩
- 出席報告

会員数	22名	本日の出席数	16名
本日の出席率	80%	修正出席率	80%

■本日の欠席者

二宮麻理子、岡田、宋

■他クラブ出席者

新川 (地区)

■ゲスト

大元麻美 様 (わたぼうし教室代表)

林 悦 様 (米山奨学生)

■皆出席祝

佐藤真吾会員 19年

■誕生日祝

福村 正会員 7月



■会長報告 北澤 正浩

11月も残り一週間となりました。本日も冷え込みましたが、これからは最低気温が10

度を切る毎日になるようなので、皆様体調を崩さないようお気をつけください。

以前皆様にご意見をいただいた、例会を通常への運営に戻す計画についてですが、来年1月より毎週の例会へ戻すことといたしました。戻すにあたり、プログラムの変更(増加)をしなければなりませんので、緊急事態宣言発令等により中止させていただいたフォーラム・卓話をまず復活させるようプログラムを組み直す予定です。

なお、皆様が楽しみにしている昼食の件ですが、残念ながら会場での飲食が禁止となりましたので、以前のような例会中に食事をするのがしばらく不可能となりました。例会前に外部の飲食店で昼食を済ませますが、しばらくの間は飲食なしの例会とさせていただきます。

急遽開催を決めましたクリスマス会についてですが、今回は開催するにあたり、

**横浜旭ロータリークラブ
クリスマス・家族親睦会
歓送迎会**

**12月18日 土曜日
6:00PM ~ 9:00PM**

【場所】横浜市旭区山手町115番地(みなとのみえる丘公園隣)
KKR ポートビル・横浜 4階
みなとみらい線 元町中華街より徒歩10分

【電話】045-621-9684

【会費】会員 10,000円
家族(18歳以上) 8,000円
コロナ感染防止の観点から会員と18歳以上の会員家族のみの募集とさせていただきます。

会費の集金はニコニコと一緒に当日おこないます。

参加/不参加を11月27日までにお知らせください。

連絡先: 親睦担当 新川 尚
電話: 090-1507-6862
Email: newriver1968@gmail.com



コロナ感染防止に配慮が必要と考え、クラブ会員と18歳以上のご家族様限定で行うこととしました。

例年のような華やかなアトラクションはございませんが、クラブ員が集まって飲食を共にすることは、旅行を除けば一年以上ありません、開催することはとても意義があると思いますので、是非ともご参加をお願いいたします。

以上の通常の状態へ戻す件について、スムーズに行えず申し訳ございません。今後も努力してまいりますのでご理解とご協力をお願いいたします。

残念な報告がございます。兵藤会員より11月19日付で退会届けが提出されました。退会理由としては、かねてより患っていた基礎疾患が進行したことにより、呼吸不全に見まわれ、主治医から外出自粛等の指導があった為とのこと。

兵藤会員には長年横浜旭ロータリーを盛り上げていただいた方で、これからも牽引していただきたいという思いがあります。退会の意向には戸惑っていますし皆様のお気持ちもあるかと思しますので、次回の理事会までは受理を保留させていただきます。

本日の卓話は、わたぼうし教室代表の大元麻美様です。お話しを楽しみにしておりますのでよろしくをお願いいたします。

【連絡事項】

○12月5日(日) 17時～19時 ZOOMにてロータリー財団奨学生 帰国報告会。参加希望の方は、事務局までお知らせください。

○11月27日(土) 13時より パシフィコ横浜会議センター 地区大会 出席をお願いします。

■幹事報告 市川 慎二

1) 例会臨時変更のお知らせ

○横浜緑ロータリークラブ

日時 12月15日(水) 夜間移動例会

「クリスマス家族会」新横浜国際ホテル

29日(水) 休会

○横浜港南ロータリークラブ

日時 12月15日(水) クリスマス夜間例会

22日(水)・29日(水) 休会

■林 悦様より

おはようございます。

最近卒業論文の締め切りが近づいて、緊迫

感も感じています。体の調子も悪くなり、なかなか眠れない状態になってしまいました。更に病気は私の意志を磨いたことが気づいて、文学への信念が更になり強くなりました。

一方、本気に卒業論文を書くと、夏の自分より成長してきたことも感じています。昨日小説への理解も、論文の書き方も前よりずいぶん成長してきたと先生からそう言われました。その点について本当にうれしかったです。

最後に最近の気温はだいぶ下がりましたので、皆様も風を引かないように、注意してください。

■理事候補指名委員会 増田嘉一郎

2022-23年度理事候補者

安藤公一、市川慎二、北澤正浩、新川 尚(幹事)
二宮麻理子、岡田 隆(SAA)、佐藤真吾(会計)
田川富男

■広報委員会 田川富男

ロータリーの友11月号を読んで

・横組み

P.7 ロータリー財団月間の特集が有りポリオとインドを財団で特集されています。

P.11 ポリオはどんな病気。自分の勉強不足ですがポリオもウイルスであり現状のコロナウイルスについてもポリオ同様にいつの日にか収束が来る時があると感じています。

・縦組み

P.10 俳壇に吉原さんの一句が入っております。吉原さんらしい一句だと思います。3度目の車椅子でコロナを収束して下さい。

■一口情報 二宮 登

50th Anniversary Tanzania JICA

TANZANIA WEEK

タンザニア本土(タンガニーカ)の独立60周年を記念し、タンザニア大使館は「JICAのご協力の下、文化イベントを」JICA横浜センターで開催します。当イベントではタンザニアの音楽、文化、芸術の魅力を紹介します。

実施日時: 2021年12月4日(土) 11:00から16:00
5日(日) 10:00から16:00

開催場所: JICA横浜センター
住所: 〒2231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1
参加費: 無料
主催: 在京タンザニア連合共和国大使館
協力: 独立行政法人国際協力機構(JICA)

イベントの内容:
▶ "Concrete Spice"によるバンド生演奏
▶ タンザニア製品展示ブースと物販
- Mumyheri (衣類、工芸品)
- Twiga Fashion (衣類)
- 株式会社バラカ (布製品、工芸品)
- ティンガティンガ絵画
▶ ファッションショー
▶ 在日タンザニア人コミュニティ

■ニコニコ

北澤 正浩／わたぼうし教室代表大元麻美様、本日はお越しいただきありがとうございます。卓話よろしくお願ひ致します。

市川 慎二／①大元様、本日の卓話宜しくお願ひ致します。②林さんようこそ。

内田 敏／大元麻美様、本日の卓話よろしくお願ひいたします。

佐藤 真吾／①大元様、本日はお忙しい所、当クラブ例会にお越し下さり有り難うございます。卓話よろしくお願ひします。②米山奨学生林さんようこそ。③皆出席祝いをいただき有り難うございます。19年になりました。

福村 正／大元麻美様、卓話楽しみです。

二宮麻理子／大元様、本日の卓話よろしくお願ひします。

二宮 登／大元麻美様、本日の卓話よろしくお願ひします。

五十嵐 正／大元様、本日は卓話よろしくお願ひします。楽しみにしております。

田川 富男／わたぼうし大元さん、ロータリーによろしくお願ひいたします。

新川 尚／わたぼうし教室代表大元様、本日はよろしくお願ひします。

安藤 公一／①大元様、本日の卓話宜しくお願ひ致します。②昨日行われた関東大学ラグビーで早稲田が慶応に勝利しました。次は12月5日の早明戦です。応援宜しくお願ひします。

吉原 則光／天気予報では朝夕の温度差はげしいが、日中は天気よいとの事です。今日の例会が稔り多き会でありますように。

■「外国につながる子どもたちの学習支援活動」わたぼうし教室 代表 大元 麻美様

最初に少しだけ略歴とロータリークラブとの繋がりをお話ししたいと思います。私が聖心女子大学で日本語日本文学を専攻し国語の教員免許を取り、大学院では大学認定の日本語教師の資格を取得しました。その後フランスでの留学を経てカトリック新聞社に入社、記者をして29年になります。次にロータリークラブとの繋がりますが、20年前に亡くなった父は日本郵船の船長していて、定年退職後、阪神パイロット水先人を務めておりました。その頃神戸ロータリークラブに所属していました。病気をして横浜に戻ってからは、港北ロータリークラブに

入りました。父が毎週水曜日の例会をととても楽しみにしていたのを今も鮮明に覚えております。

本題に戻ります。教育分野ではよく外国につながる子どもという表現を使います。これは外国にルーツがある子供という意味で使っています。外国籍の子供、また国際結婚で生まれた場合は、二重国籍が日本国籍外国籍など様々です。親が難民の場合は、日本で生まれた子供には、国籍がないので無国籍となります。国籍がない場合は日本から出ることができません。そうした外国にルーツがある子供たちすべてを含めて、外国につながる子どもと呼んでいます。

私が仲間と始めた綿ぼうし教室は、外国につながる子どもたちへの学習支援教室で、毎週土曜日の午前中、南区の国際ラウンジの部屋を借りて実施しています。場所は市営地下鉄の坂東橋から歩いて5分、京急の黄金町からは徒歩7分の所です。

活動場所である南区の国際ラウンジは、山下公園や中華街にといった横濱の観光地のちょうど裏側です。繁華街で働く外国人労働者が多く暮らしています。その活動場所の近くにある公立の南吉田小学校は、NHKでよく取り上げられるのですが、児童の60%が外国籍です。日本人の子どもの数の方が少ないです。運動会では日本語だけではなく中国語やタガログ語など色々な言葉でアナウンスが流れます。私たちの学習支援教室にはこの小学校の子どもたちが多く勉強しています。

わたぼうし教室は無料です。登録者は小学生から高校生ままで50人以上ですが、毎回20人位が来ます。今はコロナで人数制限をしています。その多くは中国から出稼ぎに来た労働者の子ども達、また国際結婚で生まれたフィリピンにルーツがある子ども達です。まず親が先に日本に来て、日本での生活が安定したら、中国やフィリピンにいる子どもたちを日本に呼び寄せるといったパターンがほとんどです。最近は難民申請中で在留資格のない子ども達も増えてきました。

来日したばかりの子ども達はまったく日本語



が分かりません。その為でわたぼうし教室では、来日直後の子ども達に、平仮名・カタカナ・漢字を教えたり、挨拶や自己紹介など簡単な日本語会話を教えたりしています。ただ日本語を覚える間に、学校での勉強がどんどん遅れていってしまいます。そのため必要に応じて日本語の他に、タガログ語・中国語・英語などで宿題を見たり、算数や理科・社会などの学習支援をして授業についていけるようにサポートしています。

コロナ禍での対面式学習支援

保護者と面談。コロナ対策を承諾した場合のみ受け入れ



コロナ前は左のような感じで勉強していましたが、現在は感染防止の為に、右のように三密を避けて勉強しています。また横浜旭ロータリークラブの皆様から頂戴したパソコンは、このようにコロナ禍でのオンライン学習への関心を支えていただいております。本当にありがとうございます。

コロナ禍でオンライン学習支援も実施



横浜市立大学、明治学院大学、横浜国立大学などの学生が自宅から学習支援

私の本職は新聞記者です。仕事とは別にこの活動を始めたきっかけを少しお話ししたいと思います。2010年取材で、日系ブラジル人3世の具志アンデルソン飛雄馬さんに出会いました。お父さんがブラジルから日本に出稼ぎに来ていたため、彼は呼び寄せられて1990年に来日しました。当時11歳現在は43歳で人権活動家として活動しています。彼は三重県にいた初めてのブラジル人児童でした。来た当初、彼は日本語がまったく分からない中で、小学校5年生に編入します。授業中がただ座っているだ

け、それでも彼は必死で日本語を勉強しました。日本語が聞き取れるようになると、こんな言葉が聞こえてきました。お前の日本語が気持ちが悪い、国へ帰れ、外人数々の悪口そして仲間外れ、そして中学に入ると今度は敬語の問題にぶつかります。同級生に話すように先輩にため口をきき、生意気だと言われ、殴る蹴るの暴力を受けます。彼は少しずつ不登校になっていきます。居場所は外国人扱いされない場所、それは強い者が認められる場所。彼は暴走族の世界に入っていました。でも高校だけには行きたかった。彼は定時制高校に入ります。しかしここでもアンデルソンという外国の名前を理由にいじめの標的にされ、彼はとうとう中退します。そして彼は暴走族の総長にまで上り詰めます。バックに暴力団が付き、二十歳になった時暴力団からスカウトされました。ある日、辞めたいと言った彼の周りには、刀を抜いた組員が取り囲んだと云います。彼は未来に絶望しました。その後彼は壮絶な苦労の末、更生し猛勉強を続け、人権活動家になります。

暴走族の総長



暴力団からスカウト

彼の話聞いた時私の頭は本当に混乱しました。国際化が進む日本で、本当にこんな話があるのかと思ったからです。三重県だけの話ではないのか、あるいは彼だけの特別な体験ではないかと思ったからです。でも彼は言いました、今の日本のどこにでも起きていることだと。彼の印象的な言葉があります。「学校さえあれば僕がこんな人生を送らずに済んだ」彼はブラジルで成績、優秀スポーツ万能、家庭に全く問題はなかった。大学にも行きたかった。でも思い描いていた人生とはまったく違う道を歩むことになった。

ここで特に問題にしたいのが、公立学校の教育システムです。外国につながる子ども達にとって大きな壁になっているのは、学齢主義というものです。日本の公立の小学校や中学校は、同じ年齢の子どもが同じ学年になる学齢主義を採用しています。日本語が全く分からなくても11歳なら小学5年生に編入します。日本語が全く分からなくても14歳なら中学校2年生に

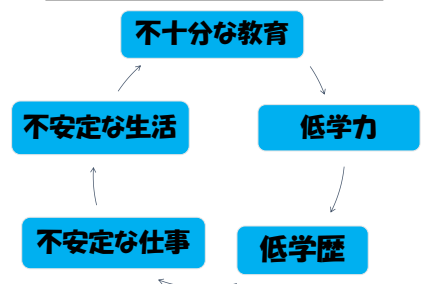
編入します。日本語が全く分からないのに、日本語で歴史や理科算数の授業を受けます。さっきのアンデルソンがそうだったように、ただ座っているだけです。現在は自治体によって授業中に通訳が入ったり、別の部屋で日本語を教えたりしていますが、そうした支援も週に2時間程度です。また経済的な問題で塾に通うこともできません。親に宿題を見てもらおうと思っても、親が共働き夜勤で家にいない、そして親自身も日本語が分からないので、宿題のプリントが読めません。それから経済的な問題で私立学校に通うのもとても難しいです。それなら外国人学校に行けばいいのにとおもいますが、日本では外国人学校は各種学校なので、自動車学校と同じ扱いです。つまり外国人学校を卒業しても、日本の義務教育を修了したという卒業資格は得られません。義務教育未修了者と扱われます。それなら国際基準のインターナショナルスクールに通えばいいという人もいますが、インターナショナルスクールは年間の学費が100万円以上、高い学校は年間で300万円もします。本当に超エリート層の学校です。このように見ていくとアンデルソンの言うように、外国につながる子どもたちに適した学校がないことがわかります。こう説明した場合よくこんな反応があります。「でも外国人は勝手に日本に来たんだから自己責任でしょ。」「学校や教育問題は日本人が考えることではない」と何度も言われてきました。しかし実は違います。勝手に来たわけではありません。日本の入国管理は非常に厳しいので、どの外国人を入国させるのか、日本政府の意向が強く反映されています。1990年に入国管理法が変わりました。入管法と呼ばれているものです。日本の労働力不足を補うために、日本政府と経済界が手を結び法律を変えました。ブラジル人など日系3世までに定住者という新しい在留資格を与えました。先ほどもお話ししたアンデルソンもこの流れの中で来日したわけです。

この定住者という在留資格はどんな仕事にも就くことができますが、内情は日本人が嫌がる、きつい・汚い・危険な単純労働させるためです。その後も日本政府は入国管理法を変えながら、在留資格を増やして単純労働する外国人を入れ続けています。

日本の便利を支えているのは外国人労働者です。工場の製造ラインで自動車の部品、コンビニの弁当、ファミレスの料理、ワインのボトル詰め、缶詰、化粧品などを作っています。また魚屋はウチの加工などを行っています。広島はカキの養殖が有名ですが、現在カキの養殖が携わっているのは日系フィリピン人です。宅配便の集積所で荷物の仕分けをしているのも外国人です。しかし日本政府は労働力は欲しいが、さっきのアンデルソンのように、その子どもたちの教育は全く考えていませんでした。十分な教育を受けられないと、アルバイトも出来ないという状況が生まれます。漢字が分からなくて領収書が書けない。液体を3倍に薄めるという算数が分からなくて、アルバイトをクビになった若者がいます。その結果、貧困の負の連鎖が起こります。不十分な教育は低学力を生みます。低学力は低学歴につながります。低学歴であれば安定した仕事に就くことが難しくなります。不安定な仕事は、不安定な生活につながります。不安定な生活で収入も得られないと、結婚して子どもが生まれても、子どもたちの教育費に回すお金はありません。世代を超えた貧困の負の連鎖につながる可能性が高くなります。

外国につながる子どもたちの中には、すでにこの貧困の負の連鎖に巻き込まれている子どもも多くいます。私は記事を書きながら世論を高め、外国につながる子どもたちの教育環境を改善したいと思ったのですが、記事を書くだけでは間に合いません。目の前の子どもたちは困難

貧困の「負の連鎖」



を抱えたままどんどん大きくなっていきます。外国につながる子どもたちの自殺、また殺人事件も起こりました。そのため実際に学習支援活動を始めることにいたしました。私の最終目標は、外国につながる子ども達のための本物の学校を作ることになりました。まずその第一歩としてわたぼうし教室を始めました。

わたぼうし教室の特徴はボランティアスタッフが全員若者であることです。その中には外国

にルーツのある学生・若者もいます。小学生や中学生の時に日本に来て日本語をゼロから勉強し、苦勞しながら進学や就職をしてきた若者達です。子どもたちと同じ体験をした若者たちは、子どもたちの悩みを聞き、勉強を教え、心のケアをします。また横浜市立大学や明治学院大学などに通う、日本人の学生も沢山ボランティアに来てくれています。それから、活動の2つ目の特徴は多言語で学習支援を行っていることです。日本語に不自由して日本語の授業についていけないのならば、子どもが分かる言葉を使って、年齢相応の学力をつけばよい、と考えています。それでも教育関係者の中では、あくまで日本語で教えるべきだという考えが根強くあります。日本語で授業を受けているうちに、いつか理解できるはずだという意見です。果たしてそうなのか少し体験していただければと思います。例えば私たちが中学2年生でエチオピアに行くことになりました。先生が黒板にエチオピアのアムハラ語で何かを書き始めました、先生が言います。「これを読んでみてください

エチオピアのアムハラ語

፩ ፪ ፫ ፬ ፭ ፮ ፯ ፰ ፱ ፲

さい。小学1年生でも読めますよ。」と馬鹿にされてもどこからどう読むのか分かりません。これは右から左に読むそうです。発音が分かりませんが1、2、3～10と書いてあります。1年間教室に入れば勉強についていけそうでしょうか。

それで私は土曜日の午後に同じ場所でもう1つの学習支援活動を始めました。横浜南インターナショナルスクールという名前の学習支援教室です。中国の子どもは漢字に強いのですが、フィリピンの子供たちは漢字に触れるのは初めてで、勉強がものすごく大変なので、フィリピンの子供たちが分かる言葉、英語やタガログ語で学習支援をしようと立ち上げました。

学習支援のことばかりをお話しましたが、実は一番大切にしていることは、子どもたちの心は元気であること、子ども達が自分自身のことを好きになること、孤立しないために居場所をつくることです。子ども達はみんな日本語が出

来ないっていう、そのことだけに縛られてしまい、そのことで劣等感を抱いているので、自分が持っている豊かな才能に中々気付くことが出来ません。それで時々フィリピン料理教室をしています。フィリピンルーツの若者達に、フィリピン料理を教えてもらい、子供たちと一緒に作って食べます。日本人の学生や若者が、フィリピン料理を学び楽しみ味わって、心の底から美味しいと言うと、フィリピンの子供達は自

文化交流・自分の文化に誇りを持つ



中国人シェフとギョーザづくり



分たちの文化を認めてもらえたと、とても喜びます。それから中国人スタッフのお父さんが中国料理のプロなので、水餃子の作り方を教えてもらったこともあります。中国やフィリピンの

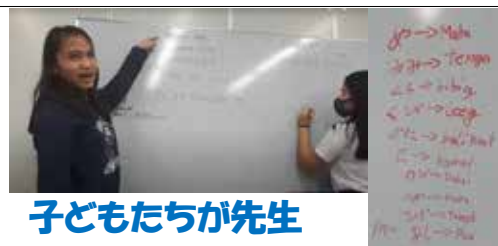
友達・仲間づくり



アニメ部

ダンス部

子どもの言語を学ぶ 協同学習



子どもたちが先生

ミーシャプロジェクト

昨年から実施

オンラインで日本の大学生が
ダバオ市スペシャルスクールの子どもに日本語を教える

来年の予定

オンラインでダバオの大学生が
横浜や浜松の「フィリピンルーツの子ども」たちに
タガログ語を教える

子ども達も一緒に皮から作り、お腹いっぱい食べました。また子ども達の居場所づくりとして学習支援教室では、子ども達の好きなダンスやアニメを楽しむミニクラブ活動もしています。写真右はダンス部と左側のアニメ部があって練習の合間に子ども達は踊ったり、好きな絵を描いたりしています。その他学習支援の休み時間に、私達は子ども達からタガログ語や中国語を教わっています。この写真はフィリピンルーツの子どもが私達にタガログ語を教えてくれている場面です。そしてコロナ前は学生や若者を連れてフィリピンのダバオ市に研修に行ってきた。コロナが明けたら毎年行くつもりなのですが、スタッフやボランティア学生たちが、フィリピンの文化に触れることによって、子ども達の文化的背景を少しでも理解することが出来ます。またフィリピンの豊かさの中で学ぶことが多く、視野が広がります。

ここから海外支援のことも少しお話ししたいと思います。フィリピンの研修先はダバオ市にある理由は、活動仲間の津村公博先生が勤務する、浜松学院大学がダバオ市教育局と教育提携をしていることからです。浜松には日系フィリピン人が多く、そのほとんどがダバオ市から来ています。その関係で在日フィリピン人の子どもたちを教育するために、ダバオ市教育局に協力を求めました。現在ダバオ市スペシャルスクールと浜松の津村先生のグループ、そして私たち横浜のグループで、セントミーシャインターナショナルスクールのオンラインスクール授業ミーシャプロジェクトを立ち上げ、いろいろな活動を行っています。

ミーシャプロジェクトとして県内に取り組んでいるのが、オンラインで日本の大学生がダバオの子ども達に日本語を教える授業です。そして来年計画しているのが、オンラインでダバオの大学生が、横浜や浜松のフィリピンルーツの子ども達にタガログ語を教える授業です。その他イベントも計画中です。

ダバオ市はフィリピン南部ミンダナオ島にあります。日系フィリピン人が多い理由として、20世紀初頭に日本人がダバオに移住し、東南

アジア最大の日本街があったことがあります。また大戦中は日本軍がミンダナオ島に上陸した事なども理由の一つです。

1990年に入管法が変わって日系外国人が日本で働けるようになりましたが、ブラジル・ペルー等の南米の他、フィリピンダバオからの出稼ぎも多くいます。こうしてダバオと交流する中で、新型のコロナウイルスの感染拡大が起こり、ダバオ市の学校も休校になりました。授業が無い間、教員達は医療ボランティアとして働きました。そして授業が再開してからは、オンライン授業となったのですが、パソコンがなくオンライン授業ができないという問題がありました。そうした中で助け舟を出してくださったのが横浜マニラ友好委員会で、二宮委員長が奔走してくださり、パソコン30台を興業商事様から寄贈してもらったという話を取り付けてくださいました。又横浜旭ロータリークラブの北澤会長様はじめ皆様にも尽力してきました。本当にありがとうございます。五十嵐様にも印刷のことは何度も助けていただきました。パソコンは既にマニラに到着したと伺っております。これからダバオに送られることになり、ダバオ市教育局でもとても楽しみにしておられ、とても感謝しておられます。

パソコンの寄贈先ダバオ市スペシャルスクールについて少し話します。幼稚園と小学校が併設している公立学校で、ダバオ市で最も古く最大規模のスペシャルスクールです。児童数は2,200人で、そのうち約3割の子どもに障害が

ダバオ市スペシャルスクールに寄贈

横浜マニラ友好委員会様、横浜旭ロータリークラブ様などのご尽力で



あります。可能性を認め、それぞれの才能を伸ばしながら共に学ぶことが特徴です。

ダバオ市スペシャルスクールには6部門があります。1つ目は通常部門、障害のない子どもで一定の知能指数のある子どもが学びます。2つ目はパストラル部門、先天的にずば抜けて高い知能を持っている子ども。ギフテッドチルドレンと呼ばれている子どもたちが対象です。3つ目はろう部門、耳の聞こえない子ども達が手話などを学びます。4つ目は知的障害部門、ダウン症など様々な知的障害者の子ども達が勉強します。5つ目は発達障害部門、学習障害、自閉症の子どもたちが対象です。6つ目が盲部門、目の見えない子どもたちは点字の打ち方や読み方など学んでいます。この学校の特徴は、子どもたちがこれらの6部門でそれぞれ学びながら、学年が上がるごとに6部門の子どもたちがどんどん混ざり合い一緒に学ぶことです。写真の高校クラスは小学5年生の英語の授業風景ですが、38人中9人に障害があります。こうした多様性を認め合う教育は、フィリピンの方が日本よりもずっと進んでいて、日本が多文化多民族共生社会を築いていく上でとても参考になります。この他ダバオ市の山間部にあるバヤニハンの小学校にも関わっています。ダバオ市の中心街から車で1時間ほどの場所で、水がないため、雨水をためて生活している貧しい地域です。雨水を飲んで病気をする子どもが多いと聞きました。裸足で歩いている子どもや鞆を持っていない子どももいますので、コロナ前は現地まで行き、靴、リュック、文房具、給食の支援をしました。給食は箱にご飯とフライドチキンを入れただけのものでしたが、子どもたちはひと口食べるだけで仕舞い始めました。理由を聞くと、家に持ち帰って家族と一緒に分けて食べるとのことでした。

貧困地域で住んでいる子どもは学校に行かずに家計を助けるなど児童労働の問題がありま

靴、リュック、文房具、給食支援



す。そのため保護者が作った工艺品を浜松と横浜で販売し、その売り上げを教育費としてダバオに送るというフェアトレード事業も行っています。このように日本でいうフィリピンルーツの子どもたちの学習支援の行う中で、送り出し国のフィリピンと受入国である日本がともに協力しながら、両国の子どもも一緒に教育していくことの大切さを感じるようになり、今も実践しています。子どもたちは様々な思いを背負っています。日本で通う子どもたちについては、日本語が分からず高校進学を断念した子ども。水道が止められ6カ月間公園に水をくみに行った難民家族の子どもがいます。シングルマザーの家庭で妹らの世話で、学習支援教室に中々来られない子ども。お母さんがフィリピン台風で亡くなり、日本人お父さんを頼って来日したものの、お父さんから虐待を受け児童養護施設に入った子どももあります。お母さんが離婚再婚を繰り返し、ストレスからリストカットした子ども、また親が精神疾患で小さい頃からカップラーメンで生活してきた子ども等、まるで野戦病院なのです。そうした生活困窮家庭の生活支援事業も始めました。子どもたちを危険から守る方法は衣食住・学習・就労支援など本物のセーフティーネットを作るしかありません。それが無い限りに子どもたちを裏社会から守ることは出来ませんが、より多くの人々と協力しながら本物のセーフティーネットを作り、わたぼうしという名前に込めた願いのように、子どもたち一人一人が、自分だけにしか出せない色や形の個性的な花を、自分が生まれた場所で咲かせてほしいと願っています。ご清聴ありがとうございました。

自分の花を咲かせてほしい!



■次週の卓話

12月18日(出) クリスマス移動例会